

とお み づか こ ぶん 国史跡 遠見塚古墳

—4世紀の仙台平野を治めた首長の墓—

しも いい だやく し じょう 下飯田薬師堂古墳(若林区飯田字中橋)

下飯田バス停の北東400m、仙台東部道路そばの水田の中にある。径約10m・高さ2mの円墳である。未調査で、時期は不明である。近くには「三本塚」の地名があり、文政6年(1823)の絵図に、「亀(井)塚」・「朝(日)塚」・「ツカ」(鶴塚か)が描かれており、3基の古墳があった可能性がある。



ほりう づか 法領塚古墳(若林区一本杉町)

聖ウルスラ学院の敷地の北東角にある。径32m・高さ6mの円墳で、南側に出入り口のある長さ約8mの横穴式石室を持つ。棺を収めた玄室は巨石が使われている。刀・轡・琥珀玉・須恵器・土師器などが出土した。7世紀前半の築造と考えられている。

せん にん づか 千人塚古墳(宮城野区岩切二丁目)

燕沢小学校北側の市道を北東に進み、仙台バイパスを渡って100mほど行き、左に登ったところにある。径約16m・高さ1.8mの円墳である。未調査で、造られた時期は不明である。古墳の西側の燕沢遺跡では、古墳時代前期の住居跡が発見されている。



ぜん のう じ 善応寺横穴墓群(宮城野区燕沢二丁目ほか)

善応寺の裏山の凝灰岩を掘って造られている。過去に23基が調査されているが、100基を超える横穴墓が存在すると推定されている。棺を納めた玄室は家形・ドーム形・アーチ形など様々な形態がある。刀・鉄鏃・勾玉・管玉・ヒスイ丸玉・ガラス小玉・金銅環などの副葬品が出土している。7世紀中ごろから8世紀前半まで造営されている。



善応寺横穴墓群から出土した長頸瓶と刀子や耳環



写真提供: 堺市博物館・群馬県埋蔵文化財調査センター・東北歴史博物館・仙台市博物館
編集発行: 仙台市教育委員会文化財課 ☎022-261-1111 発行日/平成18年3月
(表紙上: 復元整備された遠見塚古墳・下: 昭和30年頃の遠見塚古墳)

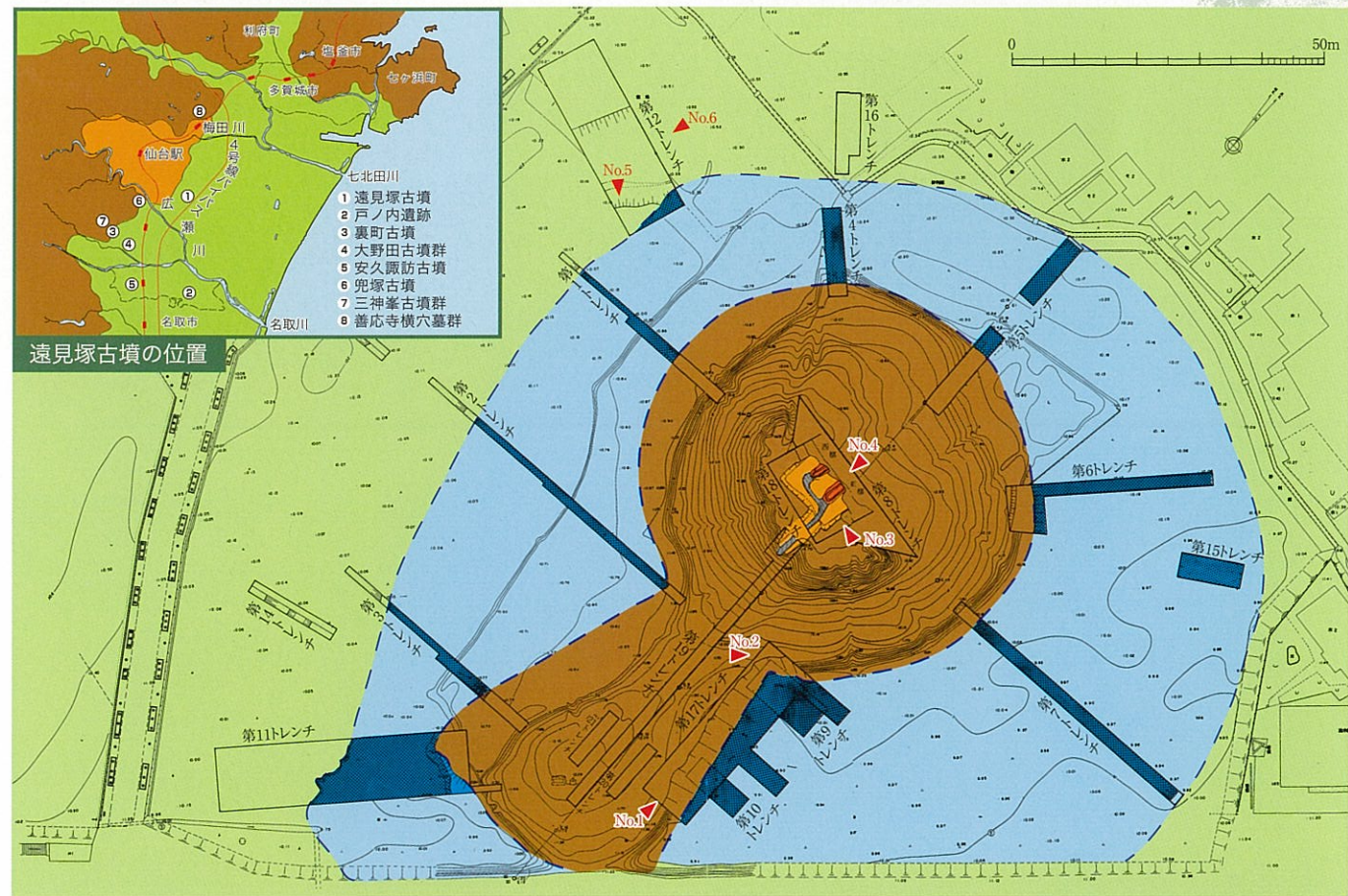


仙台市教育委員会

1 遠見塚古墳の調査

遠見塚古墳は仙台市若林区遠見塚一丁目にあります。仙台平野の中央部にあたり、広瀬川が運んだ土砂によって形成された微高地に造られています。周辺には南小泉遺跡が広がり、弥生時代から古墳時代、さらに近世までの各時代の遺構や遺物が見つっています。

古墳の発掘調査は、史跡の整備に先立ち、昭和51年(1976)から昭和57年(1982)に行なわれました。その結果、遠見塚古墳は、今から約千六百数十年前の4世紀末に造られた、東北地方でも古い古墳のひとつであることがわかりました。



遠見塚古墳の地形測量図と調査地点(整備前)

▲は掲載写真の撮影位置



前方部東側墳麓線(17トレンチ)の調査

前方部の東側は、古墳の形がよく残っています。古墳は弥生時代の地層の上に周辺の土を積んで築いています。



古墳の積み土と周溝内の堆積土

周溝には薄い粘土が何層もたまっており、周囲から土砂が流れ込んで徐々に埋まったことがわかります。

1) 古墳の形と大きさ

遠見塚古墳は、円形と台形の墳丘を合わせた「前方後円墳」と呼ばれる形をしています。古墳の周囲には「周溝」と呼ばれるやや歪んだ馬蹄形の堀が巡っています(表紙写真)。

古墳の全長は110mで、後円部の直径は63m、前方部の長さは47mです。高さは後円部が6.5m、前方部は2.5mです。周溝は幅が20~40mで、深さは0.7~3.5mあります。



昭和20年代の遠見塚古墳(西・上空から)

2) 首長を埋葬した施設

発掘調査前の遠見塚古墳は、後円部の上段の北半が削り取られ、埋葬施設は約半分が残るだけでした。埋葬施設は、後円部に「墓壙」と呼ばれる穴を掘り、この中に二つの棺(東棺・西棺)が安置されていました。両棺は南北方向に平行に並べられています。

< 墓壙 >

墓壙は東西の長さが11m、南北の長さも約10m以上あったと推定されます。墓壙の深さは1.5~1.8mあります。

墓壙の南東角には前方部に通じる通路があります。二つの棺の南端からはこの通路を通過して墓壙の外にのびる排水用の溝が掘られ、溝は玉石で埋められています。



後円部の墓壙と埋葬施設



排水溝と通路

墓壙と前方部との間は、通路状に掘られています。木棺を運び入れる際や、棺の安置後の儀式・埋葬に伴う工事のための出入りに使用されたと考えられます。

<棺>

棺は後円部が削られた際に、北半が失われてしまいました。残りの部分も、棺は腐食して残っていませんでしたが、棺を包んでいた粘土(粘土郭)の形から、丸太材を縦に割り、その中を刳り抜いて作った円筒状の「割竹形木棺」と呼ばれるものであることがわかりました。

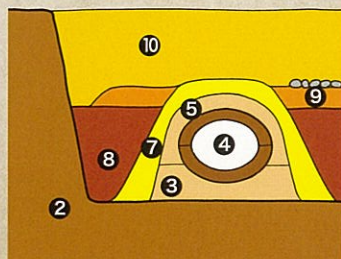
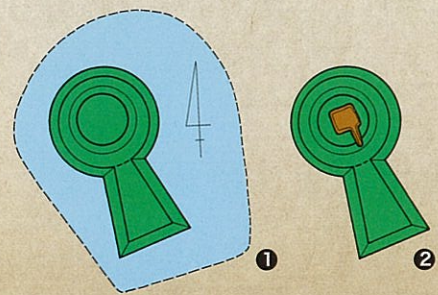
残っている部分の棺は、東棺が長さ約3.5m・幅1.1m、西棺が長さ2.6m・幅0.9mあります。ほかの古墳の例からすると、本来の棺の長さは7m以上あったと推定されます。



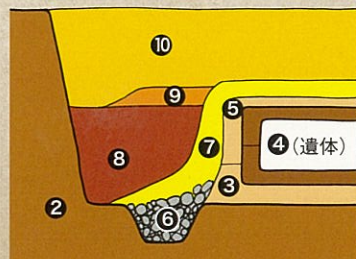
棺の埋葬部(古墳の主体部) (No.4から)

発掘調査で わかった 古墳の造り方と 棺の埋葬手順

- | | |
|------------------------------------|-------------------------------------|
| ①周溝の土を盛って古墳を造る。 | ⑥排水溝に玉石を入れて埋める。 |
| ②後円部に遺体を埋葬する墓壇を掘る。 | ⑦粘土郭の周囲をさらに白色土で覆う。 |
| ③棺を置くための台を白色粘土で造り、
台の端から排水溝を掘る。 | ⑧粘土郭の上端付近まで墓壇を埋める。 |
| ④粘土の台の上に割竹形木棺を置く。 | ⑨東西両粘土郭の上面付近を白色土で
整地し、両棺の間に石を敷く。 |
| ⑤木棺を白色粘土で包む(粘土郭)。 | ⑩墓壇全体を埋める。 |



東棺の横断面(北から)

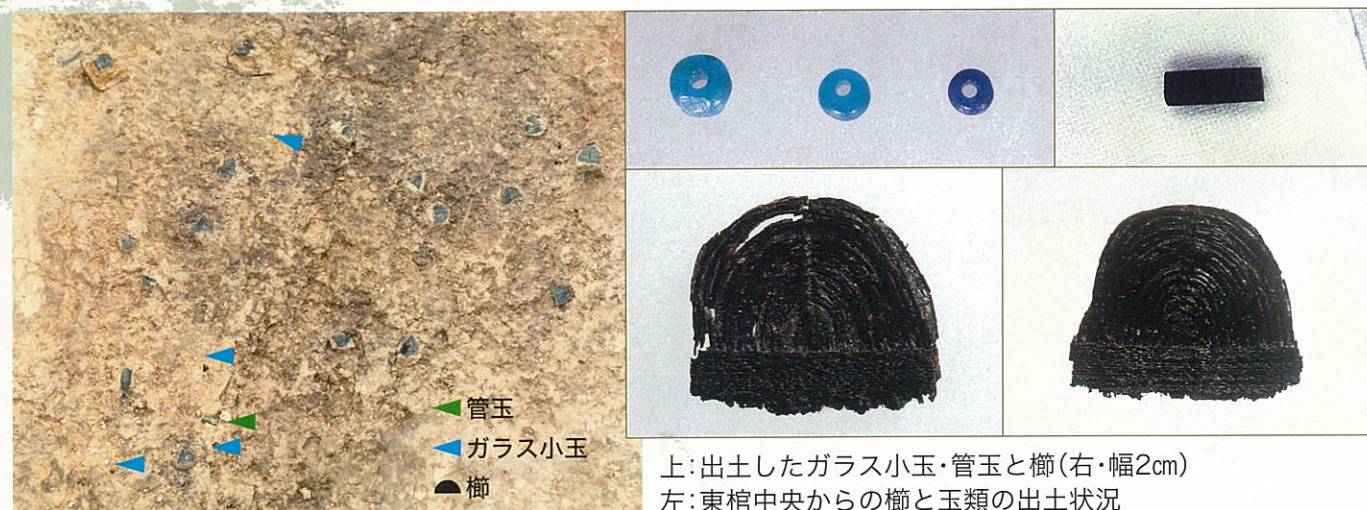


東棺の北部の縦断面

古墳の築造から埋葬までの模式図

3) 遠見塚古墳の副葬品

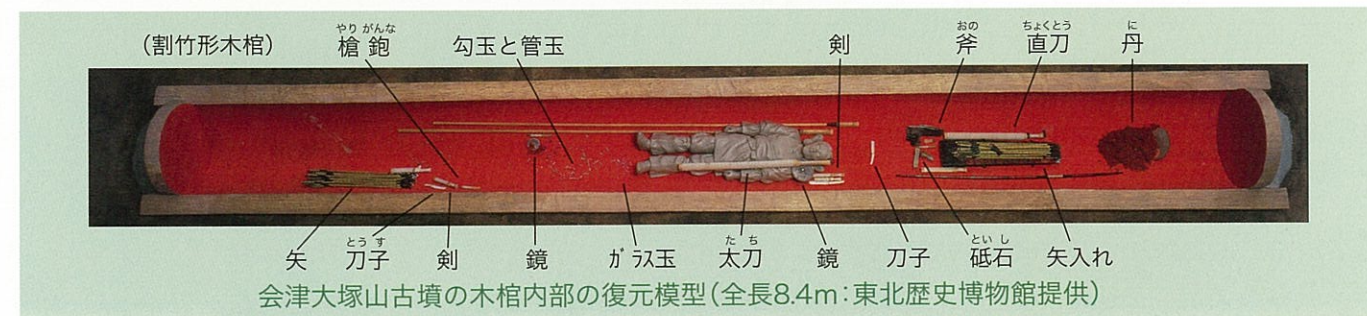
古墳からは、武器・武具・農具・工具・漁具・玉類・鏡・装飾品など多様な副葬品が出土します。これらは、埋葬の儀式や当時の信仰・服飾などにかかわるものと考えられます。



上: 出土したガラス小玉・管玉と櫛(右・幅2cm)
左: 東棺中央からの櫛と玉類の出土状況

遠見塚古墳の棺内からは、東棺から管玉1点・ガラス小玉4点・櫛20点が出土しました。西棺からの出土遺物はありませんでした。東棺から出土した管玉は、長さ18mm・直径が5mmありました。ガラス小玉は、直径が5.5~3.5mmの小さな製品です。櫛は、髪飾り用のもので、黒い漆で仕上げられています。

造られた時期と規模がほぼ同じ福島県の「会津大塚山古墳」(全長114m)からは、下の模型のように多くの副葬品が出土しましたが、遠見塚古墳は大きさの割に出土品は少ないようです。



会津大塚山古墳の木棺内部の復元模型(全長8.4m: 東北歴史博物館提供)

4) 古墳とまつり

遠見塚古墳の周りからは、古墳が造られる前の土器や、それより後の時代の土器や石製品がまとまって多量に出土しています。これらは、神聖なところで行われた祭祀や、祖先を崇拝するための儀式が行われた跡と推定されています。



古墳を作る前のまつりの跡(4世紀)



古墳が造られた後のまつりの跡(5世紀)

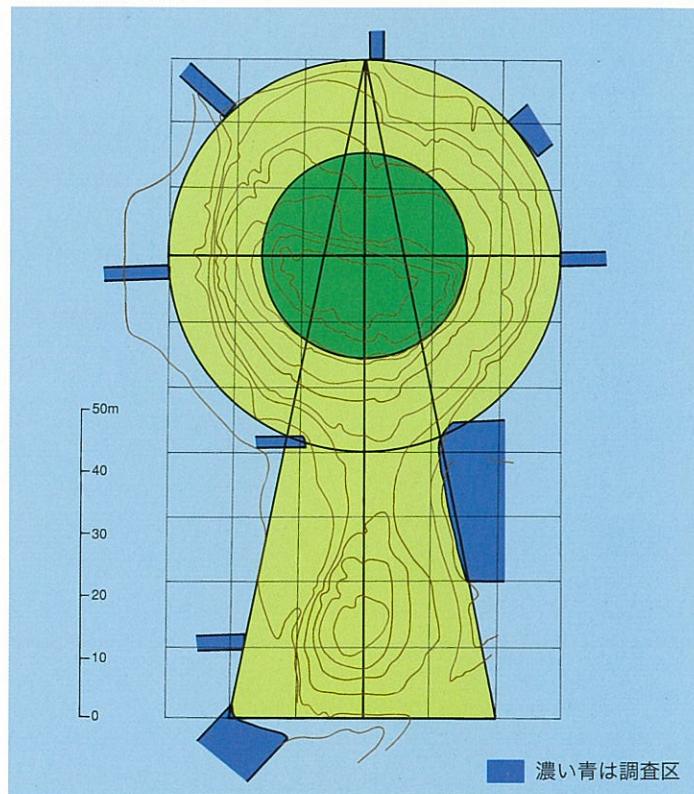
2 遠見塚古墳の造られた時代

5) 遠見塚古墳の設計図

古墳時代に前方後円墳が出現すると、各地に大きさが違って、形の似た古墳が造られます。これは、古墳を造る際に共通の設計図や物差しがあったことを示しています。

弥生時代の終わり頃に大陸からコンパスや定規を使用した図形の作成技術が伝わります。古墳の設計や古墳を実際に作る時にもこの技術が応用されたと考えられます。

古墳の設計の復元については、後円部の直径の6等分を1単位とする考えと、8等分を1単位とする考え方などがあります。右の図は、前者の方法より遠見塚古墳の設計を推定したものです。後円部の径を6等分して1単位とすると、前方部の長さは4単位で、古墳の全長は10単位になり、前方部の前の幅は4単位に復元できます。前方部の両側面は、後円部の先端と前方部の前端を結んだ線に一致します。



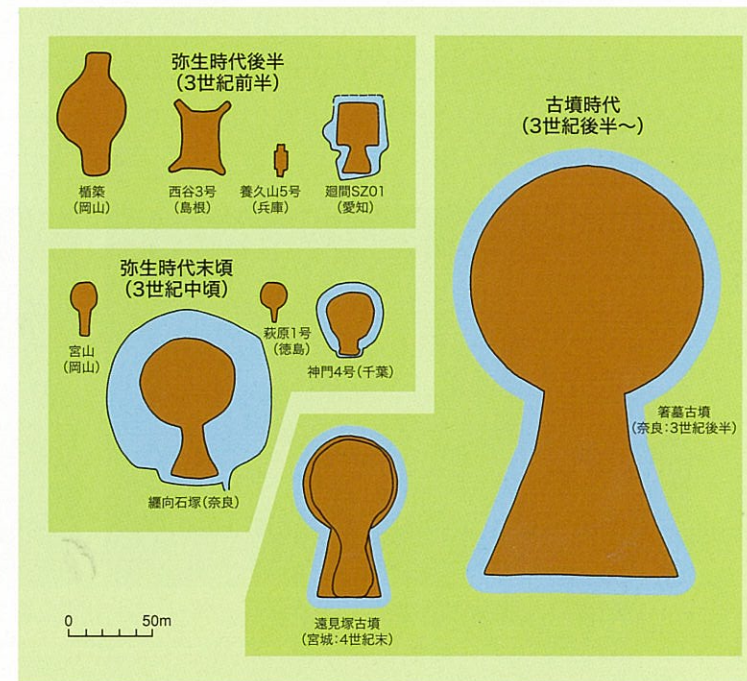
遠見塚古墳の設計図(推定復元)

1) 弥生時代から古墳時代へ ~古墳時代の始まり~

弥生時代に稲作が盛んになると、吉野ヶ里遺跡のような大きな集落(ムラ)が現われます。集落の近くには、ムラの首長のため「墳丘墓」と呼ばれる土を高く盛った墓が造られるようになります。弥生時代後期の3世紀になると、広い地域をまとめた首長のため、各地で様々な形の大型の墳丘墓が造られました。弥生時代終わりから古墳時代に移る3世紀中ごろには、近畿地方を中心に前方後円形の墳丘墓も造られます。

3世紀後半には、奈良県「箸墓古墳」を最古とする巨大な前方後円墳が出現し、「古墳時代」をむかえます。古墳時代の首長の墳墓は、弥生時代と比べると規模が格段と大きくなり、形は「前方後円墳」などに統一されます。墓に共通性が見られる理由としては、畿内の大和朝廷が全国を統一する過程で、各地の首長が大和朝廷と同じ埋葬の儀式を行うようになったからであると考えられます。

3世紀後半の大型の前方後円墳の出現から、古墳が造られなくなる7世紀後半頃までの約400年間を「古墳時代」と呼びます。古墳時代は「前期(3世紀後半から4世紀頃)・中期(5世紀頃)・後期(6世紀頃)・終末期(7世紀頃:飛鳥時代)」と区別されています。



弥生時代の墳丘墓と古墳

古墳時代を中心とした年表

西暦	時代	日本の遺跡・出来事	仙台の遺跡
数万年前~	旧石器時代	岩宿遺跡(群馬)	富沢遺跡(地底の森ミュージアム)
BC10000~	縄文時代	三内丸山遺跡(青森)	山田上ノ台遺跡・上野遺跡
BC400~	弥生時代	吉野ヶ里遺跡(佐賀)	中在家南遺跡・高田B遺跡
250~ (3世紀後半)	古墳時代	(邪馬台国の女王卑弥呼没す:248年) (纏向石塚:奈良) 箸墓古墳(奈良)	
300~ (4世紀)		桜井茶臼山古墳(奈良) 行燈山古墳(崇神天皇陵:奈良) 会津大塚山古墳(福島)	戸ノ内遺跡方形周溝墓 安久東遺跡方形周溝墓 遠見塚古墳
400 (5世紀)		誉田御廟山古墳(応神天皇陵:大阪) 大仙古墳(仁徳天皇陵:大阪)	裏町古墳 兜塚古墳 三神峯古墳群
500 (6世紀)	(飛鳥時代)	大型古墳の消滅・群集墳の盛行 仏教の伝来 横穴石室の普及	大野田古墳群 二塚古墳 一塚古墳
600 (7世紀)		法隆寺(奈良) 高松塚古墳(奈良) キトラ古墳(奈良)	法領塚古墳 善応寺横穴墓群 郡山遺跡
710~	奈良時代	平城京(奈良)・多賀城(宮城)	陸奥国分寺・尼寺跡
794~	平安時代	平安京・平等院鳳凰堂(京都)	燕沢遺跡
1192~	鎌倉時代	源頼朝 鎌倉に幕府を開く	東光寺遺跡群・岩切城跡
1603~	江戸時代	徳川家康 江戸に幕府を開く	仙台城跡

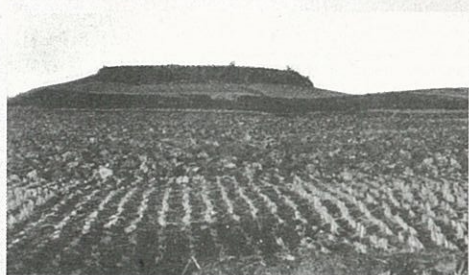
コラム 1

遠見塚古墳の危機と保存

遠見塚古墳は、江戸時代には「遠望塚」・「遠候塚」と記され、古戦場とか物見台と考えられていたようです。この古墳は、これまでに二度の大きな破壊の危機がありました。

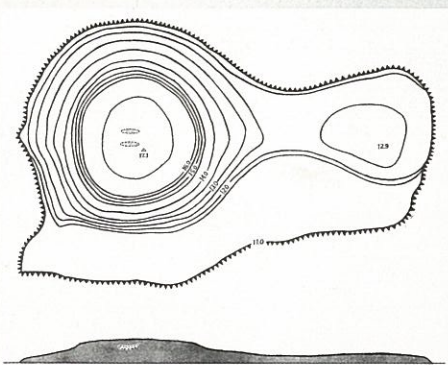
一度目は、昭和22年(1947)、進駐していた米軍が霞目飛行場を拡張工事する際、後円部の上段の北側を半分ほど削り取りました。このとき東北大学の伊東信雄教授(当時)により、粘土に包まれた棺が2基あることが確認されました。

二度目の危機は、仙台バイパス建設工事に



削平を受ける前の遠見塚古墳(昭和10年頃)と測量図

よるものです。昭和37年(1962)の計画では古墳の中央を通るルートが設定されていましたが、伊東信雄氏らの保存のための努力により、現在のように変更され、古墳を残すことができました。保存の動きかけのなかで、昭和41年(1966)に国の史跡に仮指定され、昭和43年(1968)に正式に国史跡となりました。昭和55年(1980)には未指定の周溝が追加指定を受け、現在17,000m²の範囲が指定されて公園となっています。



2) 古墳時代前期 ~畿内政権の浸透と前方後円墳の造営~

前期は、日本各地に大型の前方後円墳が出現する時期です。仙台市内では、「方形周溝墓」と呼ばれる墳墓が造られます。この中には戸ノ内遺跡で1辺が25m前後ある大型の墳墓もあり、首長層が成長していたことがわかります。このような地方の首長と畿内の政権とが結びつき、その結果として遠見塚古墳のような前方後円墳が各地に造られます。



戸ノ内遺跡の方形周溝墓(太白区四郎丸)



東北最大の雷神山古墳(名取市:全長168m)

3) 古墳時代中期 ~権力の集中と古墳の巨大化~

古墳時代中期は、各地の中心となる首長に権力が集まり、これに伴って、古墳はさらに大型化し、大和の中心としての大仙古墳(仁徳天皇陵:486m)をはじめ、各地に巨大な前方後円墳が造られた時期です。市内では裏町古墳(前方後円墳:約50m)や兜塚古墳(帆立貝形:75m)などの比較的大型の古墳が連続して造られます。



大仙古墳(仁徳天皇陵:大阪府・堺市博物館提供)



裏町古墳と出土した鏡(太白区西多賀1丁目)

4) 古墳時代後期 ~中小豪族の活躍と群集墳~

5世紀末から6世紀になると、大型の前方後円墳は次第に造られなくなり、かわって各地域で権力を得た首長層が、小型の円墳を代々密集して造るようになります(群集墳)。この段階を古墳時代後期と呼びます。初期の群集墳は小型の前方後円墳の周りに造られます。仙台市内では、大野田古墳群がこの時期にあたります。



大野田古墳群と出土した埴輪(太白区大野田)



5) 古墳時代終末期 ~仏教の広がりや古墳の終焉~

7世紀に入り仏教が広がると、徐々に古墳は造られなくなります。仙台市内では法領塚古墳や安久諏訪古墳など横穴式石室をもつ円墳が造られますが、古墳は次第に姿を消します。かわって岩山に石室を掘って墓所とする「横穴墓」が造られます。横穴墓は大年寺山から向山にかけてと、東仙台の善応寺裏山、岩切の東光寺周辺などに多数見られます。



安久諏訪古墳の横穴式石室(太白区西中田)



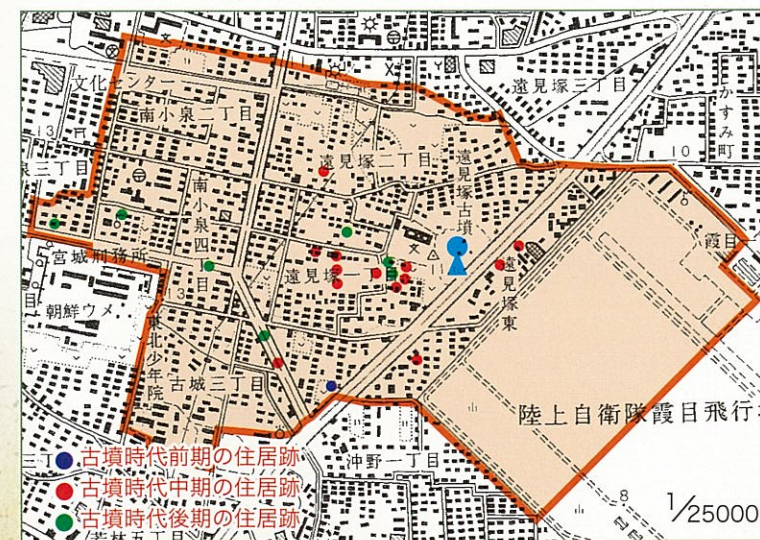
茂ヶ崎横穴墓群の調査(太白区二ツ沢)

3 古墳時代の村と首長の住まい

1) 南小泉遺跡の集落

遠見塚古墳の周辺は「南小泉遺跡」と呼ばれる遺跡で、弥生時代から古墳時代、さらに奈良・平安時代、中世・近世にわたる遺跡が東西3km・南北1.5kmの範囲に広がっています。

古墳と同じ時期の集落は明らかでなく、前期の集落や首長の住まいは別の所にあったようです。中期になると古墳を中心としての周辺に集落が広がります。後期には古墳の西側に集落が拡大します。



遠見塚古墳と南小泉遺跡



古墳時代中期の竪穴住居跡(若林区遠見塚)

5世紀後半の住居で、1辺は約4m。奥の壁の中央にカマドが造られている。



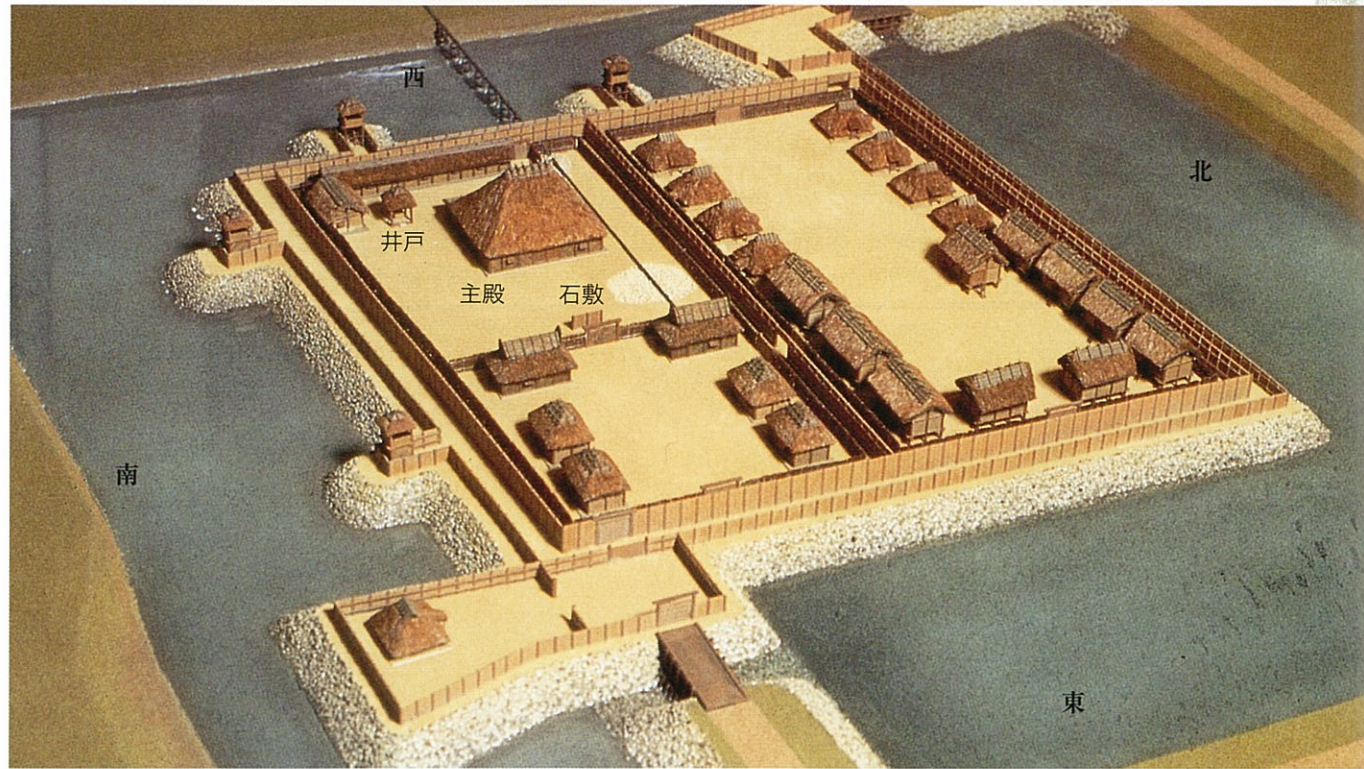
上の写真の住居跡からの出土遺物

土師器の甕・壺・坏と須恵器の壺。右下は石で作った玉や鏡の模造品。

2) 首長の居宅

遠見塚古墳の被葬者の住まいは明らかではありませんが、各地の調査で古墳時代の首長層の住まいが明らかになってきました。下の写真は、群馬県の三ツ寺I遺跡(高崎市)の調査成果に基づいて復元された首長の居宅です。

三ツ寺I遺跡は5世紀のもので、古墳から約1km離れたところで発見されました。居宅跡は約86m四方の範囲が、幅30~40m・深さ3~4mの堀で囲まれ、堀の内側には柵(塀)が巡っています。居宅跡の内部は、東西に通る堀によって南側と北側に大きく分けられています。南側の区画は、主殿と考えられる大型の建物や、長屋風の建物・井戸・祭祀場としての水路を伴う石敷きの施設などがあり、公的・儀礼的な場所となっています。北側の区画は、竪穴住居跡などからなり、首長の日常生活の場となっていたようです。



群馬県三ツ寺I遺跡の首長居宅の復元模型(群馬県埋蔵文化財調査センター提供)

コラム 2 古墳を造った道具

遠見塚古墳を造るときに使用した道具はどのようなものだったのでしょうか。市内から出土した製品によると、古墳時代前期の「鍬」はクヌギなどの板で作り、丸い柄を付けています。「鋤」(スツブ)は板材で刃先から柄まで一本の材で作られています。鍬・鋤とも鉄製の刃は付けられていなかったようです。巨大な古墳も木製の道具で築かれたと考えられます。①

- ① 鍬 (中在家南遺跡:若林区荒井)
- ② 鍬 (押口遺跡:若林区荒井)
- ③ 鋤 (高田B遺跡:若林区日辺)
- ④ 又鋤 (押口遺跡:若林区荒井)



② 長さ27cm



③ 長さ112cm



④ 長さ90cm

仙台の古墳探訪

仙台市内では、失われたものや周溝だけが発見されたものを含め、70基前後の古墳が確認されています。発見された古墳は、広い平野のある太白区・若林区・宮城野区に集中しています。ここでは残りが良好で、見学が可能な古墳をいくつか紹介します。

兜塚古墳(太白区根岸町)

仙台南高校のグラウンドの北側にある。径約50m・高さ6.8mの円墳状に残っている。調査の結果、長さ75m・後部径62mほどの帆立貝形の古墳であることが分かった。円筒埴輪や朝顔形埴輪が出土している。古墳時代中期後半(5世紀後半)のものと見られる。



三神峯古墳群(太白区三神峯一丁目)

三神峯公園の南西部に2基の円墳がある。西側が径17m・高さ2m、東側は径15m・高さ1.8mの大きさである。円筒埴輪と朝顔形埴輪が採集され、古墳時代中期後半(5世紀後半)のものと考えられている。古墳群の南側の斜面では、この古墳と同じ特徴をもつ埴輪を焼いた窯跡が見つかった。

弁天囀古墳(太白区四郎丸字昭和裏)

仙台市東中田市民センターの南方300m、善徳寺の墓地の西側100mにある。水田の中に小島のように浮かぶ円墳で径7m・高さ1.8mある。時期は不明である。古墳の東側には、方形周溝墓群が発見された戸ノ内遺跡が広がっている。



城丸古墳(太白区四郎丸字大宮)

四郎丸市営住宅の南東部、弁天囀古墳の北東400mにある。城丸大明神の境内が古墳である。径約23m・高さ2.2mの大きさである。未調査で築造の時期は不明である。

金岡八幡古墳(太白区長町七丁目)

ザ・モール仙台長町Part2の西隣にある。径約15m・高さ約3mの円墳と見られる。造られた時期は不明である。文政5年(1822)の絵図には、「舞台八幡」と記されている。鋼材関係の会社が「金岡八幡神社」を建立したことが古墳の名称の由来となった。

